

## チャーティズム末期における社会主義

古賀, 秀男

<https://doi.org/10.15017/2331286>

---

出版情報 : 史淵. 80, pp.77-104, 1959-12-20. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

# チャーティズム末期における社会主義

古賀秀男

一八四八年以後、イギリス労働運動全般にわたる日和見主義的傾向の抬頭によって、十有余年にわたって激しくもえ上つたチャーティスト運動は急速に死滅し、革命的気運は過ぎ去つた、と理解されてきたのは周知のところである。しかしこれを文字通りに理解することは果して正鵠を得たといえるであろうか。本稿はさきに公表してきたチャーティスト運動史研究<sup>(1)</sup>と一連の継続をなすものとして、一八四八年以後の末期チャーティズムの歴史的な再評価を意図するものである。<sup>(2)</sup>

さて末期チャーティズムは従来の研究史によっていかに取扱われているのか。まず二巻本の大著を著わしたドレアン<sup>(3)</sup>は一八四八年で敘述を全く打ち切り、スタンダード・ワークと見なされているホーヴェルの研究は、「一八四八年のチャーティズムの崩壊以後についてはエピソード以外に書くべきことは何も残されていない」と主張し、僅か五頁足らずの極めて簡略なスケッチを与えているにすぎない。<sup>(4)</sup>さらにベアもチャーティズムに異常な関心を示しながら、一八四八年以後については僅々二頁を割いているのみで、ローゼンブラットは一八四〇年までを対象としている。<sup>(5)</sup>一方わが国の研究を顧れば、上田貞次郎氏のパイオニア・ワーク<sup>(7)</sup>をはじめ、最近の飯田鼎氏の労作<sup>(8)</sup>においても、一八四八年以後は「チャーティスト運動の余燼<sup>(9)</sup>」としてやはり付加的位置以上は与えられていないようである。かかる取扱いは事実を正しく伝えている

のだろうか。ケニントン・コモンの大集会以後、運動は壊滅し去つたのであろうか。

ところで末期チャーティズムをやや詳細に論じたものもないではない。スロツソン<sup>(10)</sup>、ウエスト<sup>(11)</sup>、ロートシュタイン<sup>(12)</sup>の著作がそれである。しかしこれらの研究はいずれも、末期チャーティズムを一部の指導者のみの運動に墮したと理解しており、その意義と役割を充分評価していないように思われる。一八四八年以後、五〇年代初頭のチャーティズムは上述の研究史が教えるように大きな意味を有しないものであろうか。私には従来の研究がそれを不当にネグレクトしてきたように思われるのである。サヴィル<sup>(13)</sup>、ショーエン<sup>(14)</sup>或はソヴィエトの研究者によつて末期チャーティズムの再評価の試みが公けにされたのは正しくここ数年来のことであつた。

ケニントン・コモンの大集会の後、ラッセル内閣のもと官憲の弾圧は日増しに激化し、同年六月―八月の間に、組織の中核たる「全国憲章協会」の戦闘的な指導者の殆んどが逮捕され、しかもその多くが二年間の禁錮刑を直せられた<sup>(15)</sup>。残されたオーコンナー、ラヴェットらは下院の急進派グループに接近し、人民憲章を放棄し始めた。確かにチャーティスト運動はそのリーダーシップを失い、壊滅の危機に陥つたのである。しかしながらこの二年間の試練はチャーティストのエネルギーを消え尽しはしなかつた。否、一八五〇年、末期の最高指導者アーネスト・ジョーンズ（一八一九―六九）をはじめ多くのチャーティストが戦列に復帰するや、運動は再び新しいそして進んだ理論と新たなエネルギーをもつて激しくもえ上つたのである。

この「新たなチャーティズム」に特徴的なもの、それは一八四八年以前のチャーティズムに見られなかつた社会主義の主張にある。すなわち中産階級との協調を排除しつつ運動再建のためにあくなき努力を続けたジョーンズ、ジュリアン・ハーニー（一八一七―九七）らの末期チャーティストは、マルクス、エンゲルス、シャツパーらと親交を結び、国際社会主義運動に活躍するとともに、過去の運動敗北の経験を活かして一八五一年三月、明瞭に社会主義的なチャーティスト新

綱領を定め、マルクス主義に極めて接近した。かくて、労働者階級自身による政治権力獲得を目指しながらも、その社会改革の窮極目的を明確に意識していなかったチャーティズムは、一八五〇年代に至って窮極的に社会主義社会を掲げた社会主義運動へと前進したのである。それ故に、末期チャーティズムをネグレクトすることはこの理論的前進を過少評価することに他ならず、その結果チャーティスト運動をば単なる政治改革運動と理解する重大な誤謬を招くおそれあり、ひいてはイギリスにおけるマルクス主義の成長発展の不可能性を強調しようとする「ブルジョワ的」見解を弁護することにもなるであろう。私はこれらの点を反省しつつ、とくに一八五一年の新綱領に焦点を合せながら、一八四八年以後のチャーティズムの歴史的な評価と位置づけを試みたいと思う。

- (1) 拙稿「チャーティスト運動とトレード・ユニオン」(「西洋史学論集」六輯)及び「チャーティスト運動の歴史的性格と意義について—労働組合との関連において—」(「西洋史学」四十二輯)
- (2) 本稿は昭和三十二年度第五十六回史学会大会西洋史部会の報告の前半を骨子とするものである。
- (3) E. Dolléan, *Le Chartisme, 1830—1848*. 2 tomes, Paris 1912.
- (4) M. Howell, *The Chartist Movement*. London 1925. p. 294ff.
- (5) M. Beer, *A History of British Socialism*. London 1921. Vol II, pp. 172—175.
- (6) Frank F. Rosenblatt, *The Chartist Movement, Its Social and Economic Aspect*. *Columbia University* チャーティズム末期における社会主義
- (7) *Studies in History, etc*, Vol. 73, Part I (1916.)
- (8) 上田貞次郎「階級闘争としてのチャーティズム」(「産業革命史研究」大正十三年—九二三年)所収)九二—九三頁。
- (9) 飯田鼎「イギリス労働運動の生成」(有斐閣、昭和三十三年)。
- (10) 同書三三八—三頁。
- (11) P. W. Slosson, *The Decline of the Chartist Movement*. N. Y. 1916.
- (12) J. West, *A History of the Chartist Movement*. London 1920. ウェストには末期を無視したそれ以前の研究に対する批判的態度が見られる。ウェストに対する私の立場は後述。
- (13) Th. Rothstein, *From Chartism to Labourism*. London 1929. ロートシュタインは末期チャーティズムを「イ

ンターナショナルの先駆」として高く評価したが (cf. pp. 124—181)、『末期チャーティズム全体にわたる評価は充分でないようである。(cf. pp. 90—92)』。

- (13) J. Saville, Ernest Jones : Chartist, Selection from the Writings and Speeches of Ernest Jones with Introduction and Notes. London 1952. 本書については拙稿紹介「世界史研究」十八号を参照。本書中に付録として一八五一年の新綱領全文が収録をれており、大いに利用した。

- (14) A. R. Schoyen, The Chartist Challenge. A Portrait of George Julian Harney. London 1958.

- (15) B. A. Рожков, О программе чартистского конвента 1851 года. (Вопросы истории, 1957. 2) ロシコフ「一八五一年のチャーティスト大会の綱領について」B. B. Галкин, К. Маркс и Ф. Энгельс в борьбе за возрождение революционного Чартизма в начале 50—X годов XIX века. (Новая и новейшая история, 1958. 3) ガルキン「一八五〇年代初頭の革命的チャーティズム復興のための闘争におけるマルクスとエンゲルス」。ロシコフは綱領を中心に末期チャーティズムを高く評価したが、ガルキンは若干の点でロシコフには過大評価があるとして批判している。その他とくにマルクス、エンゲルスとの関連から扱ったものにセミョーノフ「マルクス・エンゲルスとチャーティズム」(一九三三)、ブイコフ「マル

クス・エンゲルスと革命的チャーティスト」(一九三四)、ミハイロフ「一八四九—一八五二年のプロレタリア党のためのマルクスとエンゲルスの闘争」(一九五五)、ハフ「一八四五年八月マルクス・エンゲルスのロンドン滞在の新資料」(一九五六)があるが、未見。なおロシア語文献の閲読は西嶋有厚、大畑勝両氏の御好意によるものである。

- (16) ケニンントン・コモンの大集会の際、十六万余の警備隊が待機したことは有名であるが、その八日後(四月十八日)、チャーティストの活動を封するため「王室及び政府保護法案」(Crown and Government Security Bill) は上院を通過し、二十日に上院通過成立した。この法律の下で、政府は特別警察、警官及び軍隊を動員して徹底的な弾圧逮捕を行った。Robert F. Wearmouth, Some Working-Class Movements of the Nineteenth Century. London 1948. p. 222ff. cf. 199. F. C. Mather, The Railways, the Electric Telegraph and Public Order during the Chartist Period, 1837—48. (History, N. S. Vol. XXXVIII Feb. 1953, No. 132) p. 47ff.

一八五〇年六月、ハーニーの編集になる“Red Republican”紙（創刊号）はチャーティズムについて次のような注目すべき評価を与えた。<sup>(1)</sup>

「一八五〇年の『チャーティズム』は一八四〇年のチャーティズムとは違ったものである。イギリスのプロレタリア層の指導者は最近数年間に極めて急速に前進し、まったくほらではなく真の民主主義者であることを証明した。彼らは単純な政治改革の思想から社会革命の思想へと前進したのである。」更に「赤旗の下におけるチャーティズムは」と翌月の同紙は述べている。<sup>(2)</sup>「労働者の主張を擁護するものである。…われわれの主張、すなわち『一八五〇年のチャーティズム』はイギリスの真の民衆の主張である。…目下われわれに与えられた課題はわが兄弟たるプロレタリアたちを大規模にこの旗の下に動員することである。」

チャーティスト自らによるこの言葉は一八五〇年のチャーティズムの性格を力強くそして明瞭・簡潔に描き出している。この立場はプロレタリア社会主義の立場そのものと呼んでよいだろう。かかる理論的前進はいかにして進められたのであろうか。

既に他の機会で述べた如く、<sup>(3)</sup>一八四八年以前の主要な指導者の間では運動の窮極目的は社会的幸福にあるとはいえ、社会主義という明確なものではなく、結局その運動は極めて不統一な労働大衆が人民憲章なるスローガンに結集されたものに他ならなかった。すなわち社会的には、産業革命末期の激しい変動の中で飢餓と貧困にあえぐ不熟練労働者、没落手工労働者層の爆発的な不満を反映したものであって、それ故に大工業制度が安定をみせ、経済状態が好転し始めた一八四二年以後、運動は急速に大衆的基盤を喪失していったのである。とくに一八四二年以来チャーティストの中に多くの分派が

現われていた。その第一は中産階級と同盟するに至った「完全選挙権同盟」の分立であり、第二には「全国憲章協会」内部における「実力派」と「道徳派」との対立であった。とくにオーコンナーが「実力派」で独裁的権力を振うに至ってラヴェットら多数はそれから離れ、またオーコンナーの小土地農民制を理想とする土地計画をめぐる対立もはらんでいった。かように第三回のそして最後の大請願を行った一八四八年はチャーティスト運動にとつてまさしく解体寸前の危機状態にあつた。しかもこの最後の大デモはオーコンナーの裏切りによりうやむやのうちに解散されてしまったのである。末期の最高指導者アーネスト・ジョーンズが革命的チャーティストとして登場したのはこの時期であり、彼はまさしくこの危機に頻したチャーティズムの体験とその自己批判の上に立っていた。

一八五〇年八月（出獄直後）、ジョーンズは一八四八年の諸事件を顧つつ次のようなチャーティスト運動再建の優れた理論と戦術とを公表した。<sup>(4)</sup>

一八四八年春の民主主義運動は驚ろくべき激しさを示した。国民大会は大衆の熱狂的支持によつて開かれ、力と団結の前にいかなる支配勢力も敵し得ないことを示すかの如くであつた。だがその内部に大きな矛盾があつた。すなわち内部で分裂が生じていたのである。そしてその分裂が「道徳派」と「実力派」との間に激化し日々に拡大していったとき、また一〇〇人の代表のうち六〇人しか召集に応じなくなつたとき、また国家の変革を主張している人々が今われわれの行つてゐることは合法的であるかどうかと論じ始めたとき、その集会場は個人の気ままな意見でお互をあげつらう道場と化した。かくて反対分子のチャーティズム非難に力を得て、ウィッグ政権は弾圧の絶好機をつかんだのである。今われわれに必要なことは団結することである。しかし団結を説くだけでは労働大衆は動かない。何故ならチャーティズムに無関心であつた労働大衆はもとより、チャーティズムに従つてきた大衆ですらチャーティズムの本質を充分には理解していなかつたからだ。われわれはこれら労働大衆の組織化を考えねばならぬ。そのためには、私は憲章のもたらす實際的社会的効果を

大衆の前に提示する必要ありと信ずる。彼らは政治権力と社会的改善との結びつきを充分理解していないと思う。彼らの前に自由の帽子を差し出したとしても、その傍に「大きなパン塊」を付け加えなければ無駄だ。この仕事こそチャーティズムとデモクラシーの擁護者たるわれわれに課せられた義務である。なかんずく十八世紀間の歴史の経験から、政治権力は社会的改善が享受される以前に獲得さるべきことを彼等に教えねばならない。協同組合やその他産業と知識とを結合させようとするあらゆる試みは、政治権力が一つの支配階級によって掌握されている限り、彼らから死の重みをもつ悲惨さを取除くことはできないということを。

ジョーンズのかかる明確な立場は、しかし一八五〇年八月に始まるものではなく、既に一八四八年のケニントン・コン大集会前後から形成されつつあった。四八年二月、ドーヴァー海峡の彼方で革命ののろしがうちあげられる直前、彼は道徳派と実力派の対立の解消を説きつつ団結を力説し、次の如く呼びかけた。

「私の前の弁士たちによつて道徳派と実力派について多くのことが語られてきました。私は両者に一線を劃そうという考えを聞くのは嫌いです。何故なら道徳（派）とは何を意味するのでしょうか。それは道理ある正しい考えであることを意味します。そして実力派とは何を意味するのでしょうか。それはその正しい考えを確立するために力をもつということをし入ったとき、もし道徳派だけで警官を動員せずしてすべて充分だとしたならば、そのような人たちは何故強盗に訓戒をたれる牧師を呼ばないのでしようか。その牧師はこう告げさえすればよいのです。『あなたは間違っている、どうか出て行って下さい、盗ったものを返して下さい。そしてどうか善良なクリスチャンであつて下さい』と。しかし彼らは結局、棍棒を使うのを余儀なくされ、もし強盗が手向うなら頭を打碎くのを余儀なくされるに相違ありません。……強盗に対しては法律を適用しなさい。そしてもし諸君が話し合いによつて彼を処分できなかったならば、その時には警官の動員を考えな



わさ<sup>(6)</sup>]

この思考は必然的にジョーンズをして実力派のチャンピオンたらしめた。だが彼は単なる暴力行為を煽動したのではない。彼は次の如く語っている。「私は実力による暴動を忠告するのでないが故に私は実力派組織の擁護者である。……それだから私は組織を擁護する。組織なくしては民衆はモツブでしかない。しかし組織をもてばそれは一つの軍隊となるのだ。」<sup>(6)</sup>「われわれの義務は何か。それは団結することである。私はわれわれが今や勝利を目前に控えていることを諸君に告げよう。」<sup>(7)</sup>と。更にジョーンズは人民憲章なしにはイギリスは、救われないと述べながら、次の如く続けている。民主主義が到来したときには、「われわれは政治機関の起動力である。もしわれわれがその力にものをいわせることができるならば、われわれはわれわれ自身で独裁することができる。そしてあらゆる他の階級に対してわれわれの至上権を認めさせることができる。」<sup>(8)</sup>そのためには、とジョーンズは力説する。「就中、チャーティストの注意を労働組合に向けさせよう。けだし労働組合こそ労働者階級の中核なのだから。……チャーターだ、くじけるな。」<sup>(9)</sup>と。

このようにしてジョーンズは既に獄中生活を送る前から優れた理論と戦術とを展開し、科学的社会主義へと接近していた。しかも彼の立場はあくまでもチャーティスト運動の実践的経験の上に、自己批判の上に立つていたのである。

しかしながらチャーティスト陣営内部における対立は激化し、全く樂觀は許されない情勢にあつた。最も大きな打撃は、一八四八―五〇の空白期におけるオーコンナーの退却であつた。オーコンナーは確かにケニントン・コモン以後も人民憲章の弁護者であり、一八四九年七月三日、五〇年七月十一日の二度にわたつて人民憲章を下院に提出した。<sup>(10)</sup>しかし彼は既にチャーティスト運動の将来に希望を失い、労働者階級独自の勢力で運動を遂行せんとする明確な立場も信念も失いつけていた。すなわち四八年以来、彼は中産階級急進派の指導者で「小憲章」<sup>(リトルチャーター)</sup>(普通選挙でなく、戸主選挙権を要求する)の主唱者ジョセフ・ヒュームに接近し、翌年にはこの「小憲章」にもとづく「全国議会及び財政改革協会」に加入し

た、<sup>(10)</sup>こうしてオーコンナーはチャーティズムを放棄したのである。かくて出獄当初からジョーンズ派とオーコンナー派との対立は避けられないものとなっていた。

ジョーンズと共闘したG・J・ハーニーとオーコンナーとの対立は既に一八四九年三月に始まっていた。当時チャーティストの機関紙「ノーザン・スター」は、所有権はオーコンナーにあるが、実際の編集はハーニーが行っていて、彼はこの機関紙を通じて democracy and red republicanism の宣伝に努めていた。ところがこのハーニーに対して、チャーティズムの信奉者と自称していたオーコンナーは、三月三日の同紙上でその republicanism と国際主義偏重に攻撃を加えたのである。この新聞はチャーティズムのためにのみ捧げられたものだ。このチャーターの主張は共和主義にも外国の革命にも何ら関係はないのだ、労働者たちよ、共和主義者の煽動に惑わされてはならないと。<sup>(11)</sup>一連のオーコンナーのハーニー批判はかくの如く反動的なものであった。ハーニーはこれに反駁を加え論争は沸騰したが、結局ハーニーも筆を柔げざるを得ないような状態であった。彼がエンゲルス宛の手紙(一八四九年三月十九日)で「彼(オーコンナー)は骨の髄までアリストクラットであつて、ただ個人的なデモクラットで身をおおっているに過ぎない。……彼はあらゆる卑俗さと不潔なブルジョワのあらゆる貪慾さを身につけている」と非難したのは当然であつた。かくてハーニーは彼自身の社会民主主義的立場をアピールするための機関紙として、四九年六月「デモクラティック・レヴュー」を発刊し、マルクス、エンゲルスの援助を受け、翌五〇年六月には一層徹底した「レッド・リパブリカン」を発刊した。<sup>(12)</sup>これらを通じてハーニーは革命的チャーティズムを護り続けたのである。一八五〇年十一月、釈放されたチャーティストを迎えて、全国憲章協会は新執行委員を選出した。<sup>(13)</sup>しかし対立は既に明白に現われていた。すなわちジョーンズ、ハーニー、レイノルズらが(一)執行委員会は中産階級との協調を拒否する、(二)人民憲章にその窮極目的たる社会改革に関する条項を付け加える、の二点を基本方針と決定したのに対し、<sup>(14)</sup>オーコンナー派は急進派・改良派との同盟をもくろみ、翌年初頭にマンチエスター会議を召集

し、(一)運動のもつ社会的目的を放棄し政治改革のみに限る、(二)中産階級(とくに「全国議会及び財政改革協会」)との同盟をはかること、を決定したのである。<sup>(16)</sup>しかもオーコンナー派は次第に勢力を増していった。翌五一年十一月、再度の執行委員選挙でジョーンズは最高点で選出されたけれども、オーコンナー、アーノット、ホリヨークら他の当選者は何れも中産階級との協調を唱える人々であった。<sup>(17)</sup>全く孤立し失望したジョーンズは、中産階級との同盟者とは協同できぬとして執行委員を辞したのである。<sup>(18)</sup>

かようにチャーティストの多数派が改良主義陣営に墮した現在、ジョーンズ、ハーニーらの革命的チャーティストにとって情勢は極めて悪化していた。しかし彼等とくにジョーンズはくじけなかつた。一八五〇年十月、マンチェスターの集会で彼は次のように演説した。<sup>(19)</sup>

議長及びマンチェスターの労働者よ。今日日曜は一八〇〇〇の説教壇から一八〇〇〇人の牧師たちが富者の福音を説いている。私はここに貧者の福音を説くために、キリストの民主主義を説くために立っている。二年前私は「団結せよ、団結せよ、団結せよ」の三つの言葉をいつたために投獄された。しかし私はもう一度この三つの言葉を繰返す。「団結せよ、団結せよ、団結せよ」と。かつて私は一人のチャーティストとして投獄された。しかし私は一人の共和主義者として出獄して来た。私はダウニング街にはためく「緑の旗」<sup>(Green Flag)</sup>について語つたために逮捕されたが、私はその後、旗の色を変えた。今やそれは赤旗なのである——と。

彼の中産階級に対する断固たる立場は、五一年五月「中産階級の選挙権—何故それが民主主義の主張に有害なのか」と題した論文で明瞭に示されている。彼はその中で、選挙権の部分的拡大はチャーティズムの力を弱めるものに他ならない。何故ならそれによつて中産階級を政権へ近づかせ、チャーティズムから完全に引離して敵の勢力を一層増大せしめることになるからである。われわれはあせつて事を仕損じてはならない。中産階級はわれわれの利益を尊重するためにわれ

われと行動を共にしているのではない。「中産階級が長年やって来たことは何だったか、それはわれわれの選挙権獲得を妨害して来たことではなかったのか。」と論じた。この立場は同年九月及び五二年六月の論説においても一貫している。とくに前者では労働者階級と利害を共にするものとして、小商店主 (small shop-keeper)、小農民 (small farmer) 兵士及び警官をあげ、それ以外の階層は敵対階級だと力説し、後者ではマンチェスター派を攻撃し、彼等は実はウィッグなのだ、しかしてわれわれにとつてウィッグはトリーナーなのだ、彼等の利害におどらされてはならない、と呼びかけた。かく、革命的チャーティストは出獄直後にジョーンズが明確に打出し一八五〇年の執行委員会によつて確立された基本方針を護り続け、そのもとに労働大衆の再結集を目指していたのである。この立場を集約的に表現したものが、五一年三月に成立し、サヴィルによつて「社会民主主義国家の青写真」<sup>(21)</sup>、ロジコンによつて「社会主義建設の計画」と評価されたチャーティスト新綱領であつた。さて従来の研究で等閑視されて来たこの新綱領とはいかなるものか。

- (1) *Red Republican*, June 22, 1850. cited from J. Saville, p. 37. ここで当時 *democrat* 或は *democracy* の用語法によつて注意せねばならぬ。それは現代で使われている如き去勢された意味ではなく、*democracy* は *communism* さやえ意味してゐたのであり、また社会革命は社会主義革命に近いニュアンスをもつてゐたのである。
- (2) *Red Republican*, July 13, 1850. cited from J. Saville, pp. 37—38.
- (3) 拙稿「チャーティスト運動の歴史的 성격と意義について—労働組合との関連において—」(『西洋史学』四十二輯)及び「チャーティスト運動とトリーナー・ユニオン」(『西洋
- (4) 洋史学論集」六) *Northern Star*, August 10, 1850. in J. Saville, pp. 109—112. cf. ditto, *Christian Socialists of 1848*. (in *Democracy and Labour Movement*) p. 153. この論文(『S』では拙稿紹介『西洋史学』三十輯を参照。
- (5) *Northern Star*, February 26, 1848. in J. Saville, pp. 27—28. (この略称は E. Jones の関する著書を示す。以下同様。)
- (6) *Northern Star*, April 1, 1848. in J. Saville, p. 98.
- (7) *Northern Star*, July 1, 1848. in J. Saville, p. 106. cf. *Northern Star*, June 10, 1848. in J. Saville, p. 103.
- (8) *Northern Star*, July 1, 1848. in J. Saville, pp. 106

—108. cf. A. L. Morton and G. Tate, *The British Labour Movement, A History 1770—1920*. London 1956, p. 98.

(9) もはやたいいすれも否決なれ、これが議会上最後の人民憲章となった。P. W. Slosson, pp. 104—105. J. West, pp. 200—262. B. B. Farkin, ctp. 66.

(10) F. E. Gillespie, *Labor and Politics in England 1850—1867*. Durham 1927. p. 77, 86ff, A. R. Schoyen, pp. 182—183. こゝは自由主義陣営と労働者陣営の同盟 (Liberal-Labour Alliance) 及び其の事である。

(11) P. W. Slosson, pp. 107—108. J. Saville, p. 43. Th. Rothstein, op. cit., p. 147. A. R. Schoyen, p. 180, 196—198 etc. F. E. Gillespie, pp. 87—88, 90. キーコンナーは共産主義の原理に反対した。 *The Labourer* (1847—48) p. 149. In Slosson, p. 41.)。

(12) B. B. Farkin, ctp. 66.

(13) A. R. Schoyen, pp. 186ff. B. B. Farkin, ctp. 67.

(14) 選ばれた執行委員及び得票数は次の通り。

	票
Reynolds	1,805
G. J. Harney	1,774
E. Jones	1,757
J. Arnott	1,605
F. O' Connor	1,314
G. J. Holyoake	1,201
Davis	818
J. Grassby	811
Miln	709

デーヴィスは辞退したの  
で Thurnton Hunt が  
繰上げ当選。  
(J. West, p. 262. Slosson, p. 114.)

(15) J. Saville, p. 44.

(16) F. E. Gillespie, pp. 89—90, 83—84. これはロンドン、ライントラのマンチェスター派および改良派たるウォルムズリー派と手を結ぶことである。またこの会議は、ジョーンズが激しく攻撃したかの「協同組合店」の設立を企てた。一八五一年の執行委員及び得票数は次の通り。

	票
E. Jones	900
J. Arnott	720
F. O' Connor	600
T. M. Wheeler	566
J. Grassby	565
J. Shaw	502
W. J. Linton	470
J. J. Bezer	456
G. J. Holyoake	336

Thurnton Hunt 282,  
P. M. M'Douall 198 はい  
ずれも落選。  
(West, p. 267)

(17) ロンドンには改良派陣営を少数としてつるが、これは疑問。(Pожков, ctp. 110.)

(18) ジョーンズはこの執行委員選挙に先立って、現在の九名から有給委員三名に減らし、真正正銘のチャーチズムを擁護せよと叫びかけた。 (*Northern Star*, Nov. 15, 1851. in J. Saville, pp. 118—119.) など、これが実質上全国憲章協会最後の執行委員選挙となった。 Cf. J. Saville, p. 48, F. E. Gillespie, p. 67. *Northern Star*, Oct. 26, 1850. in J. Saville, pp. 112—113. A. R. Schoyen, p. 198.

② *Notes to the People* Vol. I, pp. 31—33 (May, 1851). in *People's Paper*, June 26, 1852. in J. Saville, pp. 174—175.

③ *Notes to the People*, Vol. I, pp. 341—344 (Sept. 1851). J. Saville, p. 45.

in J. Saville, pp. 171—174. ④ B. A. Pokrov, ctp. 115.

### 三

ジョーンズによつて提出された新綱領は<sup>(1)</sup> (1) チャーティズム貫徹のため、すなわち労働者階級による政治権力獲得のため、チャーティスト組織のとるべき戦略、戦術を論じた部分と、(2) 政治権力獲得後の実際的な社会機構の改変を述べた部分との二つから成り立つ。

「チャーティスト全国会議の最高の義務は」と綱領は冒頭で主張する。「チャーティスト組織を拡充し、その組織を他のあらゆる政治運動から独立せしめることであり、またあらゆる階級の間政治的社会的知識を最大限に普及せしめることである。」<sup>(2)</sup> このチャーティズムの主張は、中産階級にヨリ多くの恩恵を与える選挙権の部分的拡大と全く対立する。「憲章はその完全無欠な形でかちとられなければならない。(何故なら) その要点の一つでも省略することは、他の要点のことも効力を損うことになるであろうから。」<sup>(3)</sup>

綱領は更に闘争方針として次のことを説いている。(1) 自治都市及び各教区における政治権力も人民の手に掌握さるべきこと。(2) チャーティズムは労働組合及びその他の労働者団体の間に拡大されねばならぬ。(3) 農業州では借地農<sup>フアイヤー</sup>及び農業労働者の間に運動を拡大し、更にアイルランドの民衆に、炭坑夫に、鉱夫に、また鉄道労働者にも拡大されねばならぬ。かくの如くチャーティスト組織の下に広範な下層大衆の糾合を強調した。<sup>(4)</sup> しかしこれら大衆を糾合するためには、チャーティストの目指す政治体制が現在の階級政治より遥かに優れていることを明示せねばならない。すなわち社会的変革を伴わ

ない政治的変革は無意味であり、またわれわれが実際の改革者でなければ労働者、職工、借地農、商人の支持は得られないであろう、と反省しつづ次の如く続ける。「チャーティスト団体はそれ故に、被抑圧者の擁護者として先頭に立つべきである。……現在の孤立した労働者階級の団体を共通の地盤の上にひき寄せ、結合させるまづでなければならぬ。……これら孤立した諸勢力の『統合者』として先頭に立つこと、数百万の人々を一つの纏った大衆に結合すること、この国の冬眠状態にある精神を覚醒せしめること、更にかく結集された勢力を正しい方向に前進させること、これが人民の代表たるこのチャーティスト会議の義務であり、努力すべき点である。」

以上綱領の前半は、人民大衆の代表としてのチャーティスト団体の役割を規定し、人民の政治権力獲得の闘争において前衛的役割を果すべきことを説いている。われわれはこれを「労働者党」と呼ぶこともできよう。

次に綱領の後半で説く社会機構の改変とはいかなる内容のものか。まず「土地国有は国民的繁栄の唯一の真実の土台である」と土地国有化を規定する。その方法について、政府は農業委員会を設置し、人民の手に引渡す目的でまず荒蕪地、共有地、教会領、王室領を時価で買上げ、新たに国の借地人に地代を課して貸与し、その地代収入は国家基金として一層のひいては完全な土地国有化のために使用する、と説いている。第二に教会を規定し、宗教は精神界のものとして世俗的管理にかかわりあつてはならないと説き、教会と国家との完全な分離、全教会財産を国有とする、十分の一税、教区税を全廃すること、国家は各教会の内部政策（僧侶の任免など）に干渉しない、教育事業に対する教会の認可は不要、の諸点を掲げた。第三に教育について、「あらゆる人間は物質的生活の糧を得る権利をもっているように精神活動の糧を得る権利をもっている」という原則の下に、教育の機会均等を説いた。すなわちあらゆる学校は国家によつて支弁され、全国民に無料で門戸を開くこと、その一部は義務教育とすること、技術教育を重んじ、実業学校 (industrial school) を設置して徐々に徒弟制を廃止してゆく、と規定する。

労使間の問題と労働者階級の解放を論じた第四条の「労働に関する法律」は重要である。「労働は国民の富の創造者である。……にも拘らず雇傭主と労働者との関係は今まで社会の安寧と矛盾してきた。……労働は資本の奴隸であり、自由の原理に全く反した賃金奴隸制のもとに呻吟している。現在の抑圧された状態から労働を解放するために、賃金奴隸制を一層早く徹廃し協同主義の原理を發展させるといふ考えをもつて次の方策が提案される。」<sup>(11)</sup>と綱領は述べる。ここで特に強調された方法とは協同組合を積極的に組織することで、その基本的立場は「協同主義の原理は民衆の安寧にとつて本質的なもの」といふ点にあつた。<sup>(12)</sup> 綱領は協同組合の目標として「種々の組合や協会を単位組合か或は支部とする一つの全国連合体」の創立を説き、それによつて徐々に産業の国有化（この言葉を明確には使用していないけれども）を進めることを規定しており、政治権力掌握の下における国家的規模の協同組合を考えている。<sup>(13)</sup> この場合綱領は、オウエン主義に起源をもち、一八三〇年代初頭に熱狂的に拮まりながらもあえなく消え去つた個々ばらばらの協同組合を讚美しているのでは決しない。<sup>(14)</sup> この点において綱領の見通しは基本的に正しいであろう。次に綱領は万人が働く権利をもつという立場から救貧法を規定する。すなわち身体強健で労働能力ある者と病弱・老年による労働不能者の双方を対象として前者には国家が仕事を与え、適切な雇傭が欠除せる期間は国家が生活を保障する、また後者は国家によつて生活が保障されると述べている。<sup>(15)</sup>

その他第六条の課税に関する規定以下、(七)国債、(八)通貨、(九)陸軍、(十)海軍、(出)国民軍制、(出)出版の自由について立場を明らかにした。<sup>(16)</sup> (六)では産業や生活必需品に対する課税を排し、土地及び蓄積された資本に課税さるべきを規定し、(七)では階級政府のもとで階級目的に使用される国債は人民の利益に反するとしてその償却を主張した。(九)(十)の規定は人民の自由を脅かす非民主的な軍隊制度の改革を唱え、徹底的改革を行うまでの臨時の改善措置として次のことを主張する。すなわち、徴兵者は徴兵満期が来れば、長官の更新なしにはその配属部隊に拘束されないこと、兵士は四年経てば解放されるこ



と、軍隊を市民から孤立させた兵営に任ませることは彼等に家庭生活の義務を忘れさせ、墮落させるものであり、訓練上も必要であるからやめること、軍隊が民家に宿営した場合には宿泊人として料金を支払うこと、階級の昇進は公正に行い、一年以上同階級に滞まるべきこと、並びに買収による昇進を徹廃すること、などを定めている<sup>(17)</sup>。この軍隊の非民主性は後のクリミア戦争で識者の非難的となつたが、ジョンズもこれに憤りをもつて攻撃を加えた<sup>(18)</sup>。

以上が新綱領の主な内容である。綱領の力点は前半ではチャーティスト獲得の闘争、後半では土地国有化、教会解放、教育民主化、労働者階級の解放、救貧法、軍隊制度の民主化にあり、サヴィルが「社会民主主義国家の青写真」と呼ぶだけの価値はもっている<sup>(19)</sup>。さてこの綱領は歴史的にいかにかに評価し、位置づけ得るであろうか。

この綱領を充分検討するならば、チャーティスト運動は普通選挙のみを目的とし、漠然とした激しい社会的不満を反映するのみで明確な社会的目標をもたない運動、とする評価が少くとも末期についてはいかに誤っているかがわかるであろう。それは明確に社会主義を志向している。綱領のもつ意義はそれだけではない。綱領は、チャーティスト党は政治権力獲得の闘争において、労働者を中核に農業労働者、借地農、小商人、アイルランドの民衆を糾合し指導すべき前衛党とならねばならぬと説いている。この理論はマルクス主義が深化・普及した今日でもなお正当性を失わない。しからばチャーティストとその綱領の立場は科学的社会主義として完全無欠のものであろうか。われわれは綱領の中に、階級斗争の理論を基礎として資本主義社会は発展するに従つて階級対立が激化し、必然的に社会主義社会へ移行する、という既に「共産党宣言」によつて示された唯物史観の原則が語られていないことに気づくであろう。チャーティストが唯物史観の原則を自分のものとしていたかどうかは疑問であり、革命の成功に関する長期的な見通しをマルクス、エンゲルスの如くにはもたなかったことも確実である。これがとりもなおさず一八五〇年代中期以後チャーティストを後退せしめたものであつた。だがこのことをガルキンが評価した如く直ちに彼らの根本的欠陥とすべきであろうか<sup>(20)</sup>。ここで、彼らは確かにプロレ

タリアート独裁の道は示さなかつたけれども、平和革命の道を提示したことを忘れてはならない。<sup>(21)</sup> 彼らはイギリスの現状に即しつつ普通選挙権の獲得を前提として、チャーティスト党のもとに労働者階級を結集することにより平和的に民主主義を實現し得ると主張した。「イギリスは民主主義が内戦なくして可能なヨーロッパで唯一の国である。その故にチャーティストにとつて人民憲章はイギリスで獲得するに値するものである。」<sup>(22)</sup> と。この立場はマルクス、エンゲルスによつて高く評価され、また現代における多くの労働者政党の基本的原則として生きている。かくてそこに大きな欠陥が含まれてゐるにせよ、急進主義から出発したチャーティズムが空想的社会主義を吸収し、労働運動の実践を重ね、マルクス、エンゲルスの影響をも受けながら科学的社会主義へと大きな前進を示したことは明白である。レーニンがチャーティズムを「マルクス主義へ至る『最後から一つ前の言葉』」<sup>(23)</sup> と評価したが、私はこれを「最後の言葉」という意味に理解したい。われわれは末期チャーティズムを科学的社会主義に多くの教訓を与え、それに最も接近した社会主義運動として歴史的に位置づけねばならないと思う。

その場合、オーコンナー、レイノルズ、アーノット、ホリヨークら多数の指導者が脱落していった中で、新綱領の起草者であり同時代の最も優れたチャーティスト、アーネスト・ジョーンズの果たした役割を忘れてはならない。彼は綱領成立後も、一八五一年五月に“Notes to the People”を発売し、翌五二年五月には続けて“People's Paper”を発売し、新しいチャーティスト、ガメージ、フィンレン、グローコットらとともに運動再建を目指して革命的チャーティズムを訴え続けた。運動の見通しに絶望したハーニーがジョーンズと対立し、五二年初頭以後その戦列から脱落していったにも拘らず。

さきに述べたウエストは、新綱領採択当時にチャーティズムの指導者らしい人物がいなかった、すなわちオーコンナーは病気で殆んど顔を出さず、オプライエンは代表でなく、ソントン・ハント、ハーニー、レイノルズ、ジョーンズ、ホ

リヨークラの中で指導者らしい立場にある人はいなかつたと主張し、新綱領の意義のみならず、ジョーンズの役割をも過少評価している。<sup>(25)</sup> スロソンの評価も極めて消極的である。スロソンは「チャーティズムの発展と衰滅を物語る真の問題は、その組織や指導者に対して与えた大衆の支持の量の変化の問題である」という前提の上に立つて、一八四八年以後労働大衆がチャーティズムから遠ざかつていったこと、かの新綱領はそれまでチャーティズムに従つてきた労働大衆の見解を反映せむしう遊離していたことを強調し、末期チャーティズムの意義を低く評価している。<sup>(27)</sup> これらの見解が末期チャーティズムの正しい像を伝えるものでないことは明らかであらう。

- (1) *Northern Star*, April 12, June 12, 1851. J. Saville, op. cit. App. III (pp. 257-263), Programme Adopted by the Chartist Convention of 1851, p. 46° cf. B. A. Pokrov, ctp. 111-120. B. B. Tarkim, ctp. 69-73.

- (2) *Ibid.*, p. 257.  
 (3) *Ibid.*, p. 257.  
 (4) *Ibid.*, p. 258.  
 (5) *Ibid.*, pp. 258-259.  
 (6) *Ibid.*, p. 259.  
 (7) *Ibid.*, pp. 259-260. この場合ジョーンズがオーコンナーの讚美する小土地保有利を反動として攻撃し、土地固有を説いたことに注目せねばならない。これは土地独占反対という一八世紀末の急進主義者トーマス・スペンス以来の共通の前提に立つ二人の間に、オーコンナーの反動性とジョーンズの進歩性を明示するものである。「小土地保有制は反動的なものではない。それは地主勢力を増大せしめるための「ジョーンズは主張した。」 *Notes to the People*, Vol. I, pp. 256-257 (July, 1851) in J. Saville, pp. 143-145; *Ibid.*, vol. I, pp. 53-56 (May, 1851), in J. Saville, pp. 138-140. Partly in Slosson, p. 40.

- (8) Programme, *Ibid.*, p. 260.  
 (9) *Ibid.*, p. 260.  
 (10) *Ibid.*, pp. 260-261.  
 (11) 反対にジョーンズは、後向きな性格濃厚な生産者組合を唱導したキリスト教社会主義者を厳しく批判した如く、政治権力なしの個々別々の協同組合は失敗し、労働者階級に幸福をもたらす得るものではないと厳しく批判した。J. Saville, Ernest Jones, p. 146. & cf. *Notes to the People*, Vol. I, pp. 473-6 (Oct. 1851) and *Ibid.*, Vol. I, p. 793. P. W. Slosson, p. 34, 40. J. Saville, *Christian Socialists of 1848*. (拙稿紹介「西洋史学」三十輯)

なおオウエン主義時代の協同組合運動については拙稿「イギリス初期協同組合運動の基本的性格—オウエン主義の社会的基盤—」（『西洋史学論集』三）を参照。

(15) Programme, *Ibid.*, p. 261.

(16) *Ibid.*, pp. 261—262.

(17) *Ibid.*, p. 262.

(18) "Britain's Duty to Her Soldiers" (*People's Paper*, January 13, 1855) in J. Saville, pp. 177—180. "Soldiers and Citizen. To the Oppressed of Either Class" (*Northern Star*, April 1, 1848) in J. Saville, pp. 99—102. ショーンズの父チャールズ・ショーンズはイペリア半島戦役者並びにワテルローの戦に活躍した陸軍少佐であつたことを想起せよ。

(19) ロジコフも綱領の目的を「社会主義建設の計画」と呼び、「チャーティズムによる空想社会主義の克服は、…：英国の先進労働者による空想社会主義の受容の先駆であり、空想的共産主義から科学的社会主義の理論への独特の掛橋であつた。」と極めて高く評価してゐる。(B. A. Pokrovsk, *cmp.* 116) 一方ガルキンは、綱領に「資本主義制度の滅亡の不可避性と社会主義制度によるその交代が…：述べられていない」ことから、チャーティストは「全般的階級闘争の中でのプロレタリアートの歴史的役割と位置」を充分理解し得なかつたと批判し、これを綱領の本質的欠陥であるとしながらも、チャーティズムの歴史において一八

チャーティズム末期における社会主義

五一年綱領は理論的に「巨大な進歩」を遂げたことを認め「科学的社会主義の理論の若干の最も重要な諸問題の理解において重大な進歩」をなしたことを認めてゐる。(B. B. Farkh, *ctp.* 73, 75—76.)

(20) B. B. Farkh, *ctp.* 73.

(21) ショーンズは既は一八五一年五月、世界で民主主義が早期に実現され得る国はアメリカ、イギリス、フランスの三國のみであり、他の諸国では不可能、とくにドイツとイタリアでは一七の革命が必要だと主張した。*Notes to the People*, No. 1, May 1851. in J. Saville, p. 135.) この思想は「ノーツ・ト・ザ・ピープル」の後の号(Vol. I, pp. 664—665)で一層発展し、「イギリスとフランスにおける民主主義獲得の道は本質的に異なり、フランスでは鋤とバリケードだけが決定する」と考えるようになった。ロジコフはこの平和革命論を高く評価した。(B. A. Pokrovsk, *ctp.* 116—119.)

(22) *Notes to the People*, Vol. II, pp. 664—665. cited from B. A. Pokrovsk, *ctp.* 117.

(23) マルクス「チャーティスト」(*New York Daily Tribune*, August 25, 1852. マル・エン選集第六卷九三頁)を参照。なお第四節をみよ。

(24) レーニン全集第三十卷四八頁「妥協について」(マルクス・レーニン研究所訳、五一〇頁)。ロジコフ(二〇八頁)、ガルキン(六三頁)に引用あり。

(25) J. West, p. 265.

- ⑧ P. W. Slosson, p. 44, cf. 198.  
 ⑨ Ibid., p. 106, 109—111, 198.  
 ⑩ ここでこれらの著述が、未だ社会主義が現実となっていない

かった時代のものであることに注意せねばならぬ。われわれはより正しく歴史的に位置づけ得る諸条件の下に生きている。

四

さてかかるジョーンズらの理論的立場は過去十有余年についての厳しい自己批判の上に立っていたことは繰返すまでもないが、既に指摘した如く、マルクス、エンゲルスの影響を忘れてはならない。ジョーンズ、ハーニーは、「友愛民主主義者同盟」<sup>(1)</sup>（一八四六年三月、ハーニー、シャッパー、ワイトリングらにより結成）及び「共産主義者同盟」<sup>(2)</sup>（一八四七年六月、マルクス、エンゲルス、シャッパーらにより結成）を通じてマルクス、エンゲルスに接近した。ところでその影響をどの程度評価するかをめぐってソヴィエトの研究者ロジコフとガルキンの間に見解の対立がある。すなわちロジコフがその影響を決定的だと見なさないのに対し、ガルキンはそれを決定的と見なしロジコフを批判する。<sup>(3)</sup> このチャーティスト自身による前進と、マルクス、エンゲルスの影響の何れを決定的と見なすかはなお検討を要する所であるが、切離せない関連をもつこの二要因を二者択一的に選び出すことは困難であり、その際すべてをマルクス、エンゲルスで決定させようという態度も棄ててかかるべきであろう。ここではこの問題は他に譲るとして、マルクス、エンゲルスがチャーティストをいかに評価していたか、に焦点を合せたいと思う。

まずわれわれはチャーティスト運動に対してマルクス、エンゲルスが払った関心がいかに大きかったか、を想起せねばならぬ。マルクスがエンゲルスを通じて初めてハーニーと知り合ったのは一八四五年夏のロンドン旅行のときであった。<sup>(4)</sup> この時既にエンゲルスはハーニーをはじめ多くのチャーティストと知己を結び、その前年にはイギリスにおける体験と見聞に基づく労作を著わし、その中でチャーティストの進むべき道を正しく指示するともにも大きな希望を托していた。ま

た彼等自身もチャーティスト運動から多くを学んだ。これがエンゲルス及びマルクスをしてチャーティストに対する支持と助言とを続けさせたものである。彼らのチャーティストに対する関心の大きさとその推移は、両人間の往復書簡が明瞭に物語っている。<sup>(1)</sup>

チャーティストに言及した書簡数

年	書簡数
1846	2
1847	3
1848	1
1849	1
1850	5 (11月と12月のみ)
1851	29 (5までで22通)
1852	15 (9月23日まで)
1853	10
1854	6
1855	7

(註) 1852—1854にはチャーティストを扱った多くの論文があり、何れもチャーティストを積極的に高く評価している。

この表が示す如く、チャーティスト運動に関する彼らの関心は一八五〇年末—五三年に最も大きく、わけでも五〇年十一月から五一年五月までの間(二七通)に集中している。この時期こそ出獄したジョーンズが運動の先頭に立ち、社会的な新綱領が成立した時期にはかならず、彼らの関心の推移はチャーティストの前進と後退とを鮮やかに反映しているのである。当時彼らはハーニー、ジョーンズを同志として緊密な協力を続けていた。<sup>(2)</sup>例えば一八五〇年四月、マルクス、エンゲルスはロンドンで一つの国際的組織「万国革命的共産主義者連盟」を結成したが、その規約には二人の他にウイリヒ、ブランキ派としてヴィダルとアダム、チャーティストの代表としてハーニーが署名している。<sup>(3)</sup>

しかし彼らとハーニーとの協力は長続きしなかった。ハーニーの意見は彼らからかなり離れてきたのである。両者の分離は同年九月「共産主義者同盟」内部で革命政策をめぐつて、マルクス、エンゲルスとウィリヒ、シャッパール派との間に対立が生じ、結局ハーニーが後者に組したことによつて決定的となつた。<sup>(10)</sup>ハーニーは資本主義の発展が必然的に階級闘争を激化させ社会主義へ移行するという明確な認識はもたず、それ故にマルクスが革命の勝利には数十年の激しい闘争が必要だと説くとき、それには承服し得なかつた。<sup>(11)</sup>労働者の子として貧困を経験し、その経験の中から学んだハーニーは、現実の労働者の貧困から超然とすることはできなかつた。それだからエンゲルスの十時間労働法が拒否されればそれだけ労働者階級の解放が早くなるのだという主張には同意できなかつたのである。<sup>(12)</sup>ここに理論研究から出発したマルクス、エンゲルスと実践運動から出発したハーニー（ひいては多数のチャーティスト）との大きな相違点があつたといえよう。<sup>(13)</sup>一八五〇年代において、マルクス、エンゲルスの革命理論はあまりにも理論的であるが故に労働者に深く根を下し得ず、孤立せざるを得なかつたが、他方チャーティストが実践的であろうとすればするだけ、理論的には後退していった。そこにはそれぞれのもつ限界性がひそんでおり、また両者が果す異つた歴史的役割を認めることができる。

一方ジョーンズはなお革命的チャーティズムを護り続け、マルクス、エンゲルスの信頼と援助とを得ていた。「できたジョーンズに署名つきの論文を一つ書いてやつてもらえないだろうか。彼はその新聞を続けて勉強している。ハーニーとは違ふ、それだから“Notes to the People”は盛んになつてゆく。“Friend of the People”は駄目になつてゆくのに。」<sup>(14)</sup>（マルクスからエンゲルスへ、一八五一・七・三二）「ジョーンズは全く正しい道を歩んでいる。そしてわれわれはいい得るであろう。われわれの理論なくしては彼は正しい道に入らなかつただろうと。」<sup>(15)</sup>（エンゲルスからマルクスへ、一八五二・三・一八）またマルクスは「チャーティスト」と題した論文（一八五二）の中で次のように評価している。「……しかし普通選挙権はイギリスの労働者階級にとつては政治的な力を意味する。……だからイギリスで普通選挙権をたたかいたること

は、大陸で社会主義の名によって尊重されているどんな方策よりも、社会主義の精神がこもった成果となるであらう。」<sup>(16)</sup>  
と。一方エンゲルスもまた「資本論」英語版序文（一八八六）で、マルクスの理論を説明して次の如く述べた。「少くともヨーロッパにおいては、イギリスが全く平和的な合法的な手段をもって不可避的な社会革命を遂行し得る唯一の国である。勿論彼は次のように付加えるのを決して忘れなかつた。自分はイギリスの支配階級が『奴隷制擁護の反逆』もしないで、この平和的合法的革命を享受するであろうとは期待しない」と。<sup>(17)</sup>かようにマルクス、エンゲルスは、ジョーンズらに結集されたチャーティズムを社会主義に連なる平和革命の道として高く評価したのである。

しかしながら、チャーティスト組織の弱体化は覆うべくもなく、五二年末五三年初頭には全く壊滅状態にあつた。だがジョーンズはなおも活動を続けていた。五三年初夏ランカシアのプレストンを中心に組合運動がたかまってくるや、彼はランカシアにオルグに向つた。「明日ブラックストン・エッジへゆきます。そこでヨークシアとランカシアのチャーティストの屋外集会が開かれる予定です。……一八四八年の裏切りと分裂、五百名の指導的活動家を牢獄と流刑にうばいさられて当時の組織が壊滅に帰したこと、海外移住の結果われわれの陣営がひどく手薄になつたこと、好景の影響をうけて人民の政治的エネルギーがまつたく衰えたこと—これらの事情の結果全国的なチャーティスト運動はまつたく孤立してしまい、ちやうど社会問題の知識が、労働者の間に普及し始めたそのときに、チャーティストの組織はますます弱体化しました。しかし政治組織の廃墟のうえに……労働運動が成長してきました。発生した労働運動は最初は協同組合の企てという形で出てきましたが、その不成功があきらかとなつたときには、十時間労働日の制定、機械動力の使用制限、賃金の組織的運配反対及び団結権にかんする法律の新しい解釈のための精力的闘争という形態をとるに至りました。……私は組織から脱落した無活動な地方的グループを組織化しようと努力しました。そしてイギリス全土にわたって印象深い全般的デモンストレーションを執行したいと望んでいるのです。ブラックストン・エッジの屋外集会から新しい闘争が始まるで



しよう。……」(ジョーンズからマルクスへ)

孤立無援に近い状態で遂には敗北していったにも拘らず、ジョーンズはいかに雄々しかったことか。マルクス、エンゲルスが彼に大きな期待を寄せていたのは当然のことであった。ここでまたわれわれはジョーンズを中心とする末期チャーティズムの意義を、社会主義思想史上においても、労働運動史上においても正しく評価する必要に迫られるのである。

(1) Cf. Th Rothstein, op. cit., p. 128ff. A. Müller

Lehning, The International Association 1855—1859.

(*International Review for Social History*, Vol. III 1938)

p. 196ff. なお国際社会主義運動史上におけるチャーティ

ヤストの活躍については、「チャーティストとインターナ

ショナルリズム」と題して京大西洋史読書会大会(昭和三十

三年十一月)で報告した。飯田鼎「十九世紀後半における

イギリス資本主義の変貌と労働組合運動の変転—その二」

(「三田学会雑誌」五一巻九号)はこの問題を若干取扱っ

てゐる。

(2) エンゲルス「共産主義者同盟の歴史」(マル・エン選集、

第二巻、四二七—四五三頁)・A Müller Lehning, op.

cit., pp. 193—195, 198—200. を参照。

(3) B. A. Рожков, ctp., 121—122.

(4) B. B. Галкин, ctp., 63.

(5) ハーニーとエンゲルスとの初会見は、一八四三年秋リーズ

の「ノーザン・スター」紙の事務局にエンゲルスが訪問し

た時。ハーニーは三才年少のエンゲルスを、「殆んど少年

らしい若々しい姿をした背が高くハンサムな若者」と書い

てゐる。(A. R. Schoyen, p. 129)

(6) F. Engels, Die Lage der Arbeitenden Klasse in

England. S. 291. 邦訳「マル・エン選集補巻二」三五六頁

を参照。

(7) Karl Marx, Friedrich Engels, Briefwechsel (Marx-

Engels Gesamtausgabe Dritte Abteilung), Bd.

1—4. Berlin 1929—1931. 訳文は岡崎次郎訳岩波文庫版

を利用した。

(8) 次の手紙を参照せよ。「十月二日のノーザン・スターで、

ハーニー及びフラタernal・デモクラツツの民主主義会議

開催の要求を見られたことと思う。それは支持すべきだ。

僕はフランス人の間ひそれを支持しよう。(E. M. 1847.

11. 14—15 Ibid. Bd. I, SS. 86—87)「本部(「共産主義

者同盟」の一引用者)がここ(パリ)に設けられた。

ジョーンズ、ハーニー、シャッセル、パウエル、モルがここに

いるからだ。僕は委員長に、シャッセルは書記に任命され

た。……ジョーンズは昨日イギリスへ発った。ハーニーは

病氣だ。』(M. E. 1848. 3. 12 頁 Ibid., Bd. I. S. 96.)

その他一八五〇年十一月十九日及び二三日のマルクス

からエンゲルス宛、同十一月二五日のエンゲルスからマルクス宛、同十二月二日及び十九日のマルクス夫人からエンゲルス宛の書簡を参照。(Ibid., SS. 114—124)

- (9) A. Müller Lehning, op. cit., p. 199. マル・エン選集第四卷三三二—三三三頁。なお、「共産党宣言」は一八五〇年十一月の「レッド・リパブリカン」紙上に四回にわたって訳載された。訳者はマルクス、エンゲルスが尊敬していた友人ヘレン・マクフォーレン (Helen Macfarlane) 嬢。(A. R. Schoyen, op. cit., p. 204, cf. p. 182)

- (10) A. Müller Lehning, op. cit., pp. 199—200. マルクス「ウィリヒ・シャッパー派について」(マル・エン選集第四卷三三四—三三五頁)。B. B. Фаркин, ctp. 78. ハーニーが一八五一年二月八日のポーランド民族主義運動の英雄、ベン將軍追悼集会に小ブル層に共に参加し、同二十四日の二月革命記念宴会をウィリヒ・シャッパー派やブランキストらと共に催したことがマルクスの信頼を決定的に失わせた。

- (11) A. R. Schoyen, op. cit., p. 130, 214—217. B. B. Фаркин, ctp. 73—74. 前掲「ウィリヒ・シャッパー派について」を参照。

- (12) A. R. Schoyen, p. 1, 129—131, 204—205.

- (13) ハーニーらのチャーティストから彼らが「学者」「学者先生」として嫉視されていたことについては、一八四六年十二月エンゲルスからマルクス宛書簡を参照 (Briefwechsel

チャーティスト末期における社会主義

sel, Bd. I, SS. 59—60. 訳書一—二六一—二七頁。cf.

A. R. Schoyen, op. cit., pp. 129—130.

- (14) Briefwechsel, Bd. I, S. 226. 訳書三九—四〇頁。

“Notes to the Poole” (一八五一・五一五二・五三) は最も革命的な機関紙と折紙をつけられた。

- (15) Ibid., Bd. I, S. 330. 訳書三二—三三頁。マルクスからエンゲルス宛一八六四年十一月四日の書簡を参照 (Ibid., Bd. III, S. 195)。

- (16) *New York Daily Tribune*, August 25, 1852. マル・エン選集第六卷九三頁。この中でマルクスはジョーンズがハリファックスで行った選挙演説を激讃をもって引用している。

- (17) 「資本論」岩波文庫一五六頁。

- (18) これは次の論文中に引用されたジョーンズの手紙。マルクス「イギリスの好況—ストライキ—東方問題」(*New York Daily Tribune*, July 1, 1853. マル・エン選集第六卷二二七—二二八頁)。

- (19) ジョーンズに対する誤った評価の出発点をなしたのは、チャーティスト運動史のバイオニア・ワーク、ガメーシの著作である。ガメーシは一八五四年までジョーンズ、フィンレンらとともにチャーティストとして活動して来たが、同年三月チャーティスト中央委員の選挙でジョーンズと対立して敗れた後、運動から離れた人であり、その直後に書いたのがこの研究であった。ガメーシはジョーンズに対して

個人的非難をあげせ、彼を「隠れて不正をたくらむ」、「偽善者」、「野心家で金のために動く」などと非難した。かようにガメージの研究は個人的回想に富むものであつて、詳細を極めた反面、客観性に欠ける点も多いが、また一八五四年という年にチャーティスト運動の客観的な歴史を書くことは不可能に近かつたであらう。しかしこのガメージ

の著述が後のチャーティスト運動史研究に大きな影響を与えたことは否み得ない重大な事実である。サヴィルはこの点についてガメージ批判を試みてゐる。cf. J. Saville, App. II, pp. 248-256. 拙稿紹介「世界史研究」十八号（付記）マルクス、エンゲルスとチャーティストとの関係については追つてより詳細な研究を公表する予定である。

## 結 び

以上論述した所から、一八四八年以後チャーティスト運動は死滅し去つたのか、という問に対する解答は明らかになつたことと思ふ。

確かに一八四八年以後、かつて人民憲章の旗の下に大衆的なストライキを断行し、三百万もの署名者を集め、ケニン・トン・コモンに二十万余の民衆を集めてイギリスの保守陣営を震駭させた如き大衆運動は二度と起らなかつた。運動の中核として一八四一年―二年に五万人と称されていた全国憲章協会の会員も、僅か数千へと減少し、チャーティズムの支持者は絶対的に減少したのである。しかしながらこのことが直ちにチャーティズムの死滅を意味するのではない。すなわち一八四八年以降、チャーティズムはその支持者が減少したとはいえ、ブルジョア急進主義の残滓から脱却することによつて思想的には大きく前進し、ジョンズ、ハーニーらの指導者は社会主義を目指しつつ労働者階級の団結と解放のためにあくなき斗争を続けた。かの一八五一年三月の新綱領はこの運動方針の集約的な表現に他ならず、その中にはマルクス主義を予想させる多くのものを含んでいた。それ故にこそマルクス、エンゲルスは、一八五〇年代初頭のチャーティズムに

力強い支持と助言とを惜しまなかったのである。かくてチャーティスト運動は、一八四八年以後死滅し去ったものでは決してなく、弾圧による一時の断絶があつた後で理論的に大きく前進し、マルクス主義と連なる社会主義運動として生れ変わったのである。この理論的立場をわれわれは革命的チャーティズムと呼ぶこともできよう。

かくて一八四〇年代のチャーティスト運動から五〇年代初頭のそれへの発展の様相は次の如く示すことができる。まず四八年以前の運動は、産業革命末期の社会的不安の中で、飢餓にあえぐ雑多な労働大衆が現在の境遇に対して抱いていた激しい不満を人民憲章の旗の下に爆発的な形で示したものであり、従つて明確な統一された意識と要求をもつものではなかつた。それに対し末期の運動は、低い意識の雑多な階層が脱落し、残つた尖鋭な意識をもつチャーティスト左派が運動の担い手となつて、プロレタリア革命運動的性格を濃厚にしたのである。しかも四八年以前のチャーティスト左派が生き残つたというだけでなく、左派自身が大きな理論的前進を遂げたことを忘れてはならない。かくて五〇年代初頭のチャーティズムは、チャーティズムの発展がたどりつくべき到達点であつたといふことができる。従来多くの研究はこの「発展」を無視した傾向がある。

しかしながら問題はなお残されている。すなわちこのように進んだ社会主義運動へと前進しながらも、何故運動は敗北し、衰滅し去つたのであろうか、と。それにはまず運動をとりまく客観的諸条件、とくに一八四〇年代後半以降のイギリスの経済的繁栄とそれに伴うブルジョワ急進派勢力の拡大と滲透が、運動の社会的基盤を変質せしめ、そのエネルギーを奪い去つたことを考えなければならぬが、それを考慮した上で運動に内在した主体的な諸要因が問題になるであろう。思想的な面でチャーティストの側に主体的な誤りがなかつたのか。ここでわれわれは再び一八五二年前後のチャーティズムに帰らなければならぬ。五一年綱領成立当時、組合の組織化を呼びかけていたジョンズは五一年末、合同機械工組合（二一〇〇〇人）がストを宣言したとき、これに激しい非難攻撃をあげせ、遂には「すべての労働組合はたとえ百万人を包

括していようともし全く誤つた存在である」。「政治権力なしの協同組合は無意味だ」とさえ主張した。<sup>(2)</sup> このジョーンズの組合に対する態度は明らかにセクト的であり、彼は労働者の日常的な組織活動を充分理解せず、その役割を正しく認識することができなかつたのである。この間には組合が次第に不熟練労働者を排除して高賃金労働者のみの保守的な資本主義擁護の組合(いわゆる「新型組合」)として発展し、反チャーティズムの性格を濃厚にしたという事情が入っているが、<sup>(3)</sup> ジョーンズの立場は三十数年を経たハインドマンのセクト主義に連なる問題を含んでいる。この一八五〇年代における革命的チャーティズム対新型組合、協同組合およびブルジョワ急進主義の問題にはなお検討すべき多くの点を残しているが、<sup>(4)</sup> 紙幅もつきたので他の機会に譲りたいと思う。

- (1) 拙稿「チャーティズム運動の歴史的性格と意義について——労働組合との関連において——」(「西洋史学」四十二輯)を参照。
- (2) *Notes to the People*, Vol. II, pp. 860—2 (Feb. 1852) & p. 976 (March 1852), in J. Saville, pp. 190—195
- (3) 拙稿「チャーティズム運動とトレード・ユニオン」(「西洋史学論集」六)を参照。
- (4) 新綱領の成立前後に始まり、とくに一八五二年二月に決定的となったジョーンズとハーニーの対立は、この組合運動をいかに評価するかという問題に大きな原因をもっていた。この問題については「アーネスト・ジョーンズとジョージ・ハーニー」と題して西日本史学会・九州史学会合同大会 昭和三十四年六月)にて報告した(要旨は本誌掲載)。

## **A Study on the late period of Chartism**

by H. Koga

It has been generally recognized that the years of Chartism which followed the failure of the April 10th meeting (1848) on Kennington Common, were only a trifling event in British working-class history because it is wrongly believed that Chartist ideas and Chartist politics had died by the formation of the opportunistic "new model" Engeneer's union in 1851. Strictly speaking I think this understanding is inadequate. we should not miss the excellent leadership of Ernest Jones and George Julian Harney in these years, especially the new programme of Chartism which was introduced by E. Jones in Chartist Convention of March 31, 1851 and formed the theoretical peak of this movement.

The idea of Chartism after 1848 was nearly approached the position of scientific socialism by Jones and Harney who were the intimate friend and collaborator of Marx and Engels, although their movement was not enoughly supported by working-mass: as compared with the idea of Chartism before 1848 which

only aimed the realization of the Charter and made not clear the ultimate social end, its end was in the socialist society. Although the errors of Chartist left, i.e. sectarianism to trade union movement and impatience to revolution, should not be ignored in our description, their contribution to both British labour movement and the development of socialist thought should not be extinguished in British working-class history.